

西暦二〇七十六年

とんだ玉三郎

ニュースの冒頭、アナウンサーが興奮した様子で一気にしゃべった。

「あけましておめでとうございます。本日、サン・フィナンシャルグループの創業者である渋谷栄一さんが凍結状態から解凍されて無事に目覚めたとの事です。元旦に相応しい喜ばしいニュースです。渋谷さんは今から五六年前に私財を投じて人の凍結・解凍の研究を目的とした財団を創設しました。その六年後に研究の成果が出て凍結が可能になったとの報告を受けて、自らその体験者となることを志願して五十年間の凍結状態に入りましたが、解凍されて、本日、日本時間の午前零時、アメリカの病院で目を覚ましたとのことです。この快挙は今年、三百回目の独立記念日を迎えるアメリカでも大きな話題となっているとのことです」

テレビ画面には、目を覚ましてベッドから起き上がる渋谷の姿が医師たちとともに映し出されていた。それは、二〇七十六年のことだった。

テレビを見ながらサン・フィナンシャルグループの会長の馬場は感慨深げに妻に話しかけた。

「そうか、いよいよ、お目覚めになったのか。予告通りではないか。伝説の人らしいパーフォーマンスだなあ」

「貴方も忙しくなるわね。いろいろと会社の状況を訊かれたりするんじゃない？」

「幸い、創業者の偉業に恥じない会社になったと自負しているよ。もっとも、私の力だけでなく、歴代の会長、社長をはじめ世界各地に散らばる社員たちの頑張りによるものだがね」

今ではサン・フィナンシャルグループは企業買収、投機などあらゆる分野で実績を伸ばし、日本では珍しくグローバル企業としての地位をゆるぎないものにしてている。

このグループの創設者の渋谷は、世界のグローバル企業を相手に買収、投機を繰り返して一代で巨万の富を築き、二一世紀の初めには立志伝中の人と言われ

るまでになっていた。

渋谷は二〇一九年に『後継者は育った』と言って会長の座を退いた。当時の新聞には『伝説の人、渋谷栄一氏、引退』などとセンセーショナルな見出しが躍っていた。

サン・フィナンシャルグループも渋谷氏一代限りかとも言われたが、彼が会長を退いた後も世界の好景気の波にも乗り、後継者も才覚を発揮して、順調に業績を伸ばし、グローバル企業の地位を守り抜いた。途中に浮き沈みがあったものも、半世紀以上に亘り、繁栄を続けている。

渋谷であるが会長を退いた後はいつさい会社のことには口出ししなくなった。一方、その投機・企業買収に関するセンスは右に出る者がなく、国の内外から彼に教えを乞うために訪ねてくる者が後をたたなかつた。それに付き合い、乞われれば、助言を与えていた。それ以外は専ら、趣味のゴルフに余念がなかった。

ある日、世界一の産油国であるカリフ王国の皇太子から相談を持ち込まれた。

渋谷氏はさっそく、プライベートジェットで首都のリアドへ飛んで行った。

2

「シャリーフ皇子、お久しぶりです。私はもう経済界から足を洗ったつもりですが、知己である貴方のご要望であり、さっそくやってきました」

「ありがとうございます。貴方が現役を引退したのは知っています。でも、来るものは拒まずという態度だとお聞きしていましたので。つい、声をかけてしまいました。若い私のほうが飛んで行かなければいけないところをわざわざ、お越し頂いて済みませんでした」

「いやいや、お国の中枢にいらっしゃる貴方と比べて私はフリーの身、わけが違いますよ。御気になさらないで下さい」

「さっそくですが、ご相談したいことがあるのですが」

「よろしいですよ。なんなりとお尋ね下さい」

「石油が将来にわたって、今までと同じように使われるとは思われません。この国には昔は何もありませんでした。ベドウィン、つまり砂漠の遊牧民がラクダで行き交うだけの貧しい国でした。それが偶然にも地下に驚くような埋蔵量の石油が発見されたのです。それ以来、私の先祖である国王たちはその富に頼り切って安易な暮らしをしてきました。大半の国民は遊んで暮らし、働くのは出稼ぎの外国人だけです。これではいけません。まだ、石油で稼げるうちに何

とかしないと、と焦りにも似た気持ちです。それで渋谷さんのご指南を仰ぎたいと思ひまして」

と皇子は切り出した。

この人は油田という財宝の上に胡坐をかき石油大国の凡庸な皇子ではないと渋谷は思った。石油という武器をいかに使って、将来にわたって富を保つていくかというチャレンジな課題に取り込むのだと思うと現役時代の情熱が蘇った。

「貴方の国の石油公社、これはまだ国有企業ですよ。株式を公開する予定はないですかね」

「石油は国家の財産という意識があるのか、国王をはじめ王族もあまり乗り気でないようです。株式を公開して資金を集めなくても国庫には毎年、使いきれないほどの石油代金が入ってきますので」

なかなか株式公開に踏み切れないでいるようだと言った。

「今はそれでいいかもしれないが、地球規模で気候温暖化が問題になっていきます。その元凶のひとつが石油です。この先、やり玉に上がり、太陽光などの再生可能エネルギーの利用が盛んになって石油の価値が下がるでしょう」

「確かに長い目で見ればその傾向は否定できないと思います」

「また、中東の政治情勢は不安要因です。貴方は、イスラム教の宗派同士の争いは今に始まったことではない、と思っっているかもしれませんが、イスラム圏の外からこの地域の状況を見ると、とても不安定に見えてしまいます」

「確かに、そうかもしれませんね。最近も我が国の重要な石油施設が爆破され、ショックを受けました」

「来年のアメリカの大統領選挙ですが、アメリカ社会の動向を見ていると私の勘では脱炭素をテーマに掲げる候補が勝つと思います」

「そうですか。私は環境問題に消極的な現職が勝つと思っていました。でも、貴方の勘は鋭いですからね」

「今ほどの先進諸国も低金利政策を取っており金余りの状態です。欲の深い投資家たちは儲け先を果敢に探しています。これは大きなチャンスですよ」

渋谷は悠々自適の趣味の世界に在るとは言え、なかなか世界情勢をよく把握している。

渋谷は付け加えるようにポツリと言った。

「来年は世界を揺るがすような事でもない事が起きるような気がします。それが産油国にも打撃を与えるがどうかはわかりませんが。ただ、これは私の単

なる勘に過ぎませんがね」

「それではどうすればいいとお思いですか。是非とも貴方のご意見をお聞かせください」

「まだ、世界の大半が石油の将来に不安を感じてないうちに、石油公社の株を一部でも一般公開して売りに出さないといいですか。今なら、高い値がつくでしょう」

「確かにそうかもしれませんね。個人的にはうすうす考えていました。国王たちを説得することも必要です。ところで、株売却によって得た資金を貴方ならどこに投資しますか」

「豊富でお国の広い砂漠に太陽光発電パネルを敷き詰めたいですね。送電網を張り巡らせば、アフリカやヨーロッパもカバーする大電力供給基地になることも夢ではないでしょう。さらに安い電力を『エネルギーの缶詰』にして売ることも可能です。次にグリーンランド、カナダ、それに可能であればロシアの土地を買い占めますよ。トンネル会社を使ってでも」

皇太子はポカンとした顔をして尋ねた。

『『エネルギーの缶詰』って、なんですか』

「脱炭素社会を目指すにあたって、燃やしても二酸化炭素の出ない水素が貴重な燃料となることは間違いありません。現に、航空機メーカーでは水素を燃料とする旅客機の開発が始まっています」

「発電した電気を使って水を電気分解すれば水素が作れますから、可能ですね。それくらいの量の水なら淡水化技術を使って海水からでも取れます」

「これから水素が船舶や航空機の燃料になることは間違いありません」

『『グリーンランドやカナダの土地を買い占める』とおっしゃいましたね。その理由はなんですか』

「地球の温暖化がかなりの早さで進んでいます。今後、脱炭素社会に向かうにしろ、この傾向は将来も続きます。温暖化のためシベリアの凍土が溶けて、氷漬けのマンモスが地上に現れたり、建物の基礎を支えている地盤が緩んで建物が傾いたりしています」

「そのニュースは見たことがあります」

「ずっと、先のことになるかもしれませんが、現在の寒冷地が将来、広大な穀倉地帯や樹林地帯と変わることは間違いないでしょう。代わりに、今、穀倉地帯であるアメリカ中西部やアルゼンチン辺りは気温の上昇で高温に適した品種への改良を進めたとしても生産量が大幅に減るでしょう」

「なるほど、アフリカやアジアの国々の人口はますます増えていくのでしょうか」

ら、それらの人たちの胃袋を満たすというわけですね」

「そうです。ちよつと、口幅つたい言い方ですが、私は金儲けをさんざんやってきました。今は将来の地球にどう貢献できるかをもつぱら考えています。人が生きていくためには食糧とエネルギーは欠かせません。お国の貴重な財産を是非とも、そのことに使って頂きたいと思うのです」

「ところで、原子力発電に投資すると言うのはいかがでしょうか。日本や欧米のプラント建設会社や電機メーカーの会長さんや社長さんたちがよく売り込みにきます」

「確かに、脱炭素という観点からはひとつの選択肢ではありません。しかし、先にお国であった石油施設の爆撃のようなことが原子力発電所に対して行われたらどうしますか。それを承知の上でやるには、発電所の要塞化が求められるのではないのでしょうか。それは建設コストの上昇に繋がります。また、福島事故以来、世界中で原発アレルギーが高まっていますからそれも懸念材料となります。私はあまり賛成しません。ただ、『卵は一つのカゴに盛るな』ということわざがありますように、リスク分散のためには選択肢のひとつとする手もあります」

「本当にありがとうございます。貴重なご意見、是非、参考にしたいと思えます」

と言って、皇子は渋谷に深々と頭を下げた。

カリフ王国の皇子に夢を語った後、渋谷は帰りの飛行機のなかで、話し相手でもある親子ほど年の離れた大野有希に皇子へのアドバイスの内容を手短に話し、そのあと、寂しそうに笑いながら言った。

「皇子には僕の構想を語ったが、残念ながら、僕はその実現を見届けることもなく死んでいくだろう」

渋谷は数年前に妻を癌で亡くしており、子供もなかったので会社に話し相手として紹介してもらった有希の存在は有り難かった。しかし、いつまで自分の話し相手だけではいけない。恋人はいるそうなので早く結婚して欲しい。その時には自分に娘がいればしたであろう最大のお祝いをしてやりたいと思っていた。

ぼんやり、そんなことを考えていると有希が言った。

「ところで、貴方の語った構想が実現するとすれば、それはいつ頃と考えているのですか」

「早くて五〇年、いや六〇年かな」

「貴方は、まだ六九才ですよ。その頃は一二〇才から一三〇才。年よりずっとお若いし、元気です。また、その頃なら医療も今より進んでいます。見届けられると思います」

と有希は樂觀的に慰めるように言った。

「いやいや、僕の友人に医者がいるが、残念だが、どんなに医学や科学が進歩しても、人間は一二〇才以上生きられないようにできているのだからって言うていた」

と渋谷は寂しく笑った。

「そうですかね。私、今、思い出しました。アメリカに面白い研究をしている学者がいるってこと、雑誌で読んだことがあります」

有希はその記事の内容をかいつまんで話した。

それによると、人間を完全に凍結状態にして好きな時期に目を覚まさせるという研究をしている人がいるとのことであった。凍結が何年、あるいは何十年続いてもその間には年をとらない。凍結された時の状態で目覚めることが出来るというものであった。まだ、動物実験の段階であった。しかし、精子の凍結でもあるまいし、そんなことは出来るわけがないと、医療界ではまともに受け取る学者はいなかった。それで研究のための資金を募っているがなかなか思うようにいかないことであった。本人はその実現に非常に自信を持っており、資金さえあれば「将来を見ることが可能になるのに」と悔しがっているとの事だった。

渋谷は、有希のこの話に興味を持ち、雑誌に載っていたアメリカの大学にその研究をしているというカーライル教授を訪ねていった。

「渋谷さんが発展途上国から疫病を撲滅することを目的にした医療財団に巨額の寄付をしていることは知っています。でも、私はあいにくとその分野は専門ではありません」

とカーライル教授は、なぜ、渋谷がわざわざ尋ねてきたのかと訝し気な顔をして言った。

「貴方がどんな研究をされているのかを知ってわざわざ来たのです」

と言って、その研究が成功すれば、数十年後の世の中を自分の目で確かめることが出来るというのであれば凍結されてみたい。それで興味を持っているのだと来意を説明した。

「私は五、六年後には凍結状態になりたいのです。それから五〇年間凍結されて、その後に目を覚ましたいのです」

「五、六年というのは、どういう意味ですか」

「今、やり残したことを整理するのにも時間がいります。それに、この研究も実現にはこれからそれくらいの間が必要ではないかと考えたからです。もちろん、研究費のバックアップは全面的にやらせて頂くつもりです」

「わかりました。きちんと研究して方法をちゃんと確立してから、やって欲しいということですね」

「そういうことです。十億ドルを用意しますので、貴方の研究に使ってください。もし余るようなことがあれば貴方の後継者なり、不老長寿の研究している人たちに使ってもらって下さい。この条件でどうですか」

「もちろん、やらせてもらいます。ただ、貴方が目覚めた時には私はおそらくこの世にいないでしょうから結果を見届けることはできませんが」

「いやいや、貴方はまだまだ、お若い。そんなことを言わずに自分の目で研究成果を見極めてください」

「もちろん、絶対に成功するように頑張ります。でも、もし失敗したら、いや、五、六年たっても実現しない場合はどうなりますか」

それを聞いて、渋谷は高笑いして言った。

「私は今まで、多くの相場を相手に勝負しましたが、賭けに負けたことがあります。絶対に失敗しないと信じています。どうか安心して自信を持って存分にご研究ください。よろしくお願いします」

さらに、窓の外に目を向け、遠くを見ながら言った。

「私には大きな夢があります。五〇年後の世界を自分の目で見てみたいのです。そこで、私が賭けた夢がどう実現しているか、この目で確かめたいのです」

カーライル教授は古来より、『不老不死』の薬を求めてやまない中国の皇帝などの気持ちはこの大富豪を前にして理解できたような気がした。また、渋谷が自分の夢を追っているのだと思うとなんとしても研究を成功させたいという思いが募った。

六年後、渋谷は凍結の実現が可能になったとの連絡を受けてほっとした。指定された時期にアメリカに飛び、カーライル教授の待つ大学病院に向かった。そこで、凍結状態に入るプロセス、そこからの覚醒の方法などについて詳しく説明を受けた。

まず、睡眠薬で眠らせて、その後、徐々に体温を下げていき、最後は瞬間的に凍結するものであった。目を覚まさせるには、その逆で、瞬間的に解凍し、その徐々に体温をあげていき、通常の体温まで戻し、薬で覚醒させるものであった。やがて、渋谷は長い凍結状態に入った。

五〇年間の凍結から目覚める日が近付いてきた。教授の跡を継いだ孫弟子にあたる医師たちが渋谷の覚醒に取り掛かった。それは二〇七五年の年末のことであった。渋谷の解凍が始まった。

いよいよ、完全に目覚める日が来た。渋谷は意識が徐々に戻るのを感じた。体の筋肉も落ちてない、手足も意のままに動かせる。起き上がろうとすると周りの医師が制した。

「徐々にですよ。徐々に動かしてください。筋肉も凍結された時の状態と同じになっていきます。しかし、急に動かすと筋肉が硬直するなど不測の事態も考えられますので」

と言われて、渋谷はその命令に従い、徐々に慣らしていった。

頭も爽快で、いつもの目覚めと変わらない。凍結前の記憶も鮮明に思い出された。やがて、通常の食事が摂れるまでになった。渋谷は施設からホテルに移動した。そこで一週間ほどゆっくりして帰国した。

空港に着いた渋谷は報道陣を振り切り、自宅に向かった。帰宅してカリフ王国からの帰りの飛行機で、人の凍結を研究している医師のことを話してくれた有希のことを思い出した。

カリフ王国から帰国して、数ヶ月して有希が付き合っていた男性と結婚すると聞いて渋谷は我が子のことのように嬉しかったことを昨日のことのように覚えていいる。その夫も今から一〇年前に亡くなり、有希は息子夫婦と暮らしながら渋谷の帰還を心待ちにしていたようだが、二年前に亡くなったとのことだった。元気なら有希も九〇才を迎えたはずだが残念なことをした。さっそく、有希の墓前に花をたむけようと思った。

帰宅の翌日、男が尋ねてきた。

「サン・フィナンシャルグループの会長をしております馬場です。はじめてお目にかかります。渋谷さん、いや、元会長、ご生還、おめでとうございます」
渋谷の手を取ろうとする馬場の手を押し戻して言った。

「ありがとう。でも、面白い挨拶をするね、『はじめてお目にかかります』はい

らないよ。言わなくてもわかっているのだから。また、『ご生還』はないだろう。宇宙飛行士でもあるまい」

と笑いながら、言った。

その顔は会長室に飾ってある額に入った写真と寸分たがわないのだ。

馬場は「まるでタイムマシンのようだ」と思った。

「私の顔になにか付いているかね。不思議そうに見ているが……」

と渋谷は馬場を見つめながら言った。

「いや、大変失礼しました。お顔が会長室の御写真とまったく同じなので驚きました」

「君もおかしなことを言うね。当たり前だろうが、本人なんだから」と大笑いだ。

「それもそうですね」

と馬場も相槌を打った。五〇年以上前に会長だった創業者が目の前にいると思うと馬場は狐につままれたような気になると同時になんといいものかと言葉を探した。

「……」

「サン・フィナンシャルグループは健在と言うか、私が創業した頃に比べてもむしろ隆盛を誇っているようじゃないか。創業者としても本当に嬉しいよ」

「はい、歴代の会長のあいだで引き継がれたことがあります。『渋谷さんが凍結から覚めた時に創業者を失望させるようなことはあってはならない』という言葉です」

「そうか、皆、そういうふうに使っていたのか。嬉しいが、私はそうは思っていなかったよ。『凍結』を思い立ったのは、自分の未来予測、未来と言っても高々五〇年程度だが、私が将来のことを考えてやったことが的を射ていたか見たい、未来がどうなっているか見たいという好奇心に駆られたからだよ。ただ、それだけだ。会社の運命なんて栄枯盛衰だ。無くなっていれば、それはそれで仕方ないと思っていた」

「そうでしたか。しかし、創業者の復活は励みになり、凍結からの帰還の話は歴代の幹部や社員の励みにもなっていました」

「もう、二二世紀も近いというのに、随分、古風なことを言うねえ」と穏やかな目をして馬場に言った。

「何かお手伝いすることがあれば、なんなりと言ってください」

「そうか、じゃあ、好意に甘えてひとつお願いしたい。残念ながら、私の妻は

随分前に亡くなった。その後、現役を退いた頃に、話し相手になってくれていた女性も最近亡くなったようだ。私には子供もない。天涯孤独になってしまった。それで、私の話し相手になれってくれる人をひとりでも紹介して欲しいのだ。また、いろいろなところにも行ってみたい。ただ、この五〇年間で世の中も大きく変ったようなので今の世の中は全く不案内だ。よろしく頼むよ。私は、ことし、一二五才になる。いや、五〇年間は休んでいたから、七五才だが、まだまだ好奇心は旺盛だ」

「お安い御用です」

「私の凍結からの解凍のことが随分、センサーショナルに報道されているようだが、宇宙飛行士でもあるまい。報道関係者にあまり騒がないように言ってくれないか」

「分かりました。広報に指示しておきます」

それから、馬場は挨拶をして渋谷の自宅をあとにした。それから数日して、ひとりの女性が訪ねてきた。

「失礼します。馬場会長から渋谷元会長のお世話をしようにとの言いつけで参りました。サン・フィナンシャルグループの地球環境事業部の川越莉と申します」

渋谷は、その顔を見て目を疑った。有希そっくりではないか。それも、話し相手をしてくれていた頃の有希と同じ年恰好である。

「川越さん、よろしく頼みます。僕は浦島太郎だ。何もわかっていない。あ、浦島太郎って、わかるかなあ」

「知っています。竜宮と乙姫の話でしょう」

「そうか、安心した。まだまだ、会話が成り立つようだ。五〇年経って大きく変り、若者とは言葉も通じなくなったのではと不安に思っていた。元会長というのはよしてくれないか。渋谷さんでいいよ」

「わかりました。じゃあこれから、渋谷さんと呼ばせて頂きます」

「ところで、大野有希さん、いやそれは旧姓だ。結婚して武田姓になった。その人に君はとでもよく似ている。その人は僕が会長を辞めた頃に話し相手になってくれた人だ。そうは言っても五〇年以上前のことだ」

「武田さんは私の祖母の姉にあたります。武田さんから渋谷さんの話をよく聞きました。従叔母の影響を受けて私はサン・フィナンシャルグループに入ったのです」

「そうだったのか。大野さんには随分とお世話になったなあ。残念ながら最近、亡くなられたそうだね」

「ええ、二年ほど前に亡くなりました」

「そうだってね。早速だが大野さんのお墓参りをしたい。墓は新潟にあると聞いた。でも今頃は雪に埋もれているかもしれないな。それでもいいから連れて行ってくれないかな」

「承知いたしました。新潟には雪なんか降ってませんよ。いまはやっと紅葉の季節が始まったばかりです。一月に雪景色が見れる年もたまにあるそうですが、今時は、雨ばかりです。まるで梅雨のようです」

「どうということなんだ。今頃、紅葉ということ。紅葉の季節は秋、一〇月から一一月にかけてだったのに」

「渋谷さんは地球温暖化の影響を盛んに気にされていたと聞いていますが、それが原因ですよ。私の故郷も新潟ですが、冬の豪雪はなくなり皆、喜んでいきます。しかし、冬は雪の代わりに雨がよく降ります」

莉は事前に、昔、渋谷が環境問題に大きな感心を持っていたと聞いていたので地球環境事業部の自分が世話をするように言いつけられたのだろうと思った。

「温暖化は未だに続いているのか」

「いや、最近はなつてようやく気温上昇は少し落ち着きましたが、まだ続いています。なかなか急には止まらないようです」

「ゼロ・エミッションを二〇五〇年までに達成するとの国も言っていたが……」

「とんでもないです。それが理想でしたが、石炭、石油、天然ガスはずっと使われていました。日本から石炭火力発電所が完全になくなったのはわずか一〇年前のことです」

「五〇年以上前になるが、カリフ王国の皇太子に太陽光発電の導入を薦め、その方面に投資しろ、と盛んに言っただけ。彼もその方面に投資したはずだが、そんなに進んでなかったということかね」

「太陽光発電パネルも製造の過程でたくさん二酸化炭素が出ますから、反対運動が持ち上がったって普及が一時停滞した時期があったそうです。その後、改良が進み、少ない資源で出来る発電パネルが開発されました。それからは大々的普及するようになりました。起こした電力で水素を作り、旅客機や船の燃料に利用されています」

「僕の予想した通りだ」

「二〇四〇年のアメリカの大統領選挙に『地球温暖化ストップ』をシングル・イシューとして掲げた女性候補が当選してから脱炭素化への世界の取り組みが大きく変りました。彼女は、国連に働きかけて、率先してリーダーシップを取りました。それで本格的に地球に優しいゼロ・エミッション化が動き出しました」

「どんな仕組みだったのかね」

「遺伝子操作で極めて効率よく光合成を行えるようにした樹木を植えて空気中のカーボン（二酸化炭素）を吸収し、それを鉄鋼や建築資材の生産でカーボンを大量に出している企業や国に買い取ってもらうというものです。カーボンの価格は上下するので投機の対象となっています。サン・フィナンシャルグループもカーボンの投機は今でも注力している事業のひとつになっています」

「以前からその考えはあったがようやく実現したわけだ」

「地球温暖化で得をしたのはカナダ、ロシア、グリーンランドなどいまままで寒冷地と言われていたところです。温暖化で穀物も取れるようになりましたし、広大な森林も出来つつあります。樹木の成長過程で吸収したカーボン（二酸化炭素）を排出権としてインド、中国などの工業国に売るのです」

「つまり、それまで寒くて穀物や樹木が育たなかった土地で気温が上がって育つようになったわけだ。その結果、それらの国が潤った。僕の予測通りだ」

「そうなんです。今では、効率よく二酸化炭素を吸収できる成長の早い樹木を遺伝子操作で作りに出す技術の開発競争が企業間で熾烈になっています。サン・フィナンシャルグループもその方面への出資にも力を入れています」

「さっき、インド、中国が工業国っていたな。日本やアメリカはどうなっているのか、気になるね」

「アメリカは巨大グローバル企業を核に通信・情報などサービス産業で稼ぎ、中国、インドに次いでGDP世界第三位の地位を保っていますが、残念ながら、日本はGDPではインドネシアなどにも遅れをとり、ベトナムなどと余り変わらない順位です。グローバル企業がなかなか出て来なかったことや人口減少などが経済の停滞を招いているようです」

「そうだったのか。昔、『失われた二〇年』とよく言われたが、二〇年どころでなかったということだ」

「ところで、僕が親しくしていたカリブ王国の皇子はその後、国王になったよ

うだが、この国も脱炭素で打撃を受けたと思うが、今、どうなったかな」

「カリフ王国ですが、今は国名がナシヤートに変わっています。渋谷さんが親しかつた国王ですが、砂漠に太陽光発電パネルを敷き詰めるいう広大な構想を実現させて、発電した電気を使って水素を作って液化燃料にして大型タンカーで世界各地へ輸出してます」

「その構想は僕が当時の皇子に相談されて薦めたものだ。実現したのか、よかった。皇子、国王は、九〇才近いはずだが……」

「まだご存命です。王政は廃止されて民主国家になっていますが、国王は日本の天皇のような立場になられ国民にも愛されているようです」

「まだお元気なのか。是非、お会いしたいものだ。先方は幽霊かと思ってびっくりするだろうがね」

「分かりました。さっそく手配してみます」

「ところで海面も温暖化で上がったのだろうね」

「はい、水位が上がりがり消滅した国もいくつかあるようです。それらの国の人たちを日本も受け入れていきます」

莉は渋谷に言われて国王に連絡を取った。国王も渋谷の「凍結から生還」のニュースを知っていて、是非会いたいとのことだった。再会できるとは何よりだと大喜びだった。

さっそく、渋谷は飛んで行った。

国王は渋谷を広大な宮殿で出迎えた。

「皇子、いや、国王、渋谷です。国王とお会いするのは五〇年ぶり以上ですね。お元気そうでなによりです。昔の面影があります。すぐ国王と分かりました」

「前にお会いしたときには、私のほうがずっと若かったのに逆転されてしまいました」

「なんとも変な感じですね」

「そう言えば、昔、相談に乗って欲しいという私のお願いをお聞き入れて頂き、わざわざお越しく下さいましたね」

「私はその時にいくつかの助言を差し上げましたが、それを実行して頂いたとお聞きしました」

「貴方の助言通りに実行して、お陰で我が国は石油から脱却して、貴方のおっしゃった『エネルギーの缶詰』を世界各国に輸出するクリーンエネルギー大国になりました。貴方のお陰です。国名もナシヤートと変えました。ナシヤート

はアラビア語で『エネルギー』を意味します」

「とてもよい決断だったですね。聞くところによると世界の旅客機や船舶の燃料のほとんどがお国の水素だというじゃありませんか」

「お陰さまで。当時の貴方の先見の明にはほとほと感心しました。さらに、あの時、『来年は世界を揺るがすようなとんでもない事が起きる』と予言されましたが、まさにその通りでしたね。疫病が蔓延して原油価格も暴落、大変なことになりました。その前に、株を公開して高値で売れたことはまことにラッキーでした」

「そうでしたね」

渋谷も当時の疫病の大流行のことを思い出した。

「カナダやグリーンランドの土地も買われたのですか」

「貴方を信用して大量に買いました。今ではそれらが富をもたらしています。ご存じですがそこで採れる穀物だけでなく、二酸化炭素排出権の売買でも利益をあげています」

渋谷は帰国して思った。将来を見たいとの一心で踏み切った凍結だが、自分の予測がほぼ当たり、カリフ国を通じて世界の脱炭素化に貢献できたことに幸せを感じた。

それを見届けることが出来たのも、突飛に見えたカーライル教授の研究を紹介してくれた有希のお陰である。有希の墓前に感謝の気持ちを伝えたいと思った。

(了) (11924字)